

「道徳」の源泉としてのムハンマド (二)

—イスラム教徒にとっての道徳を理解するために—

保坂 俊司

三、道徳思想の再考

- (一) 道徳の語義
- (二) 「道徳」という言葉
- (三) 歴史時代の道徳の起源
- (四) 人倫の理法としての倫理
- (五) 人間中心の道徳の諸相
- (六) 宗教(絶対基軸)無き道徳の限界性

三、道徳思想の再考

改めて道徳を考える。

前回ムハンマドの生涯について検討しましたが、道徳の根源としてのムハンマドについて日本人が理解す

るためには、もう少し「道徳」そのものへの理解、つまり「道徳」概念がイスラムと日本人の間で共有されないと難しいように思われますので、以下で「道徳」の概念について、簡単に整理してみましよう。

というのも、先にも触れたように道徳という言葉の表面的な意味の対応のみでは、イスラムの道徳は理解できませんので、今一度私達の「道徳」観を支える価値の構造、具体的にはその歴史的背景、社会的背景、そして精神的背景などの概要を知る必要を感じたからです。

特に、イスラムの道徳を理解するうえで問題となるのが、彼らの道徳がイスラム特有のグウヒード（集約的一元論・詳しくは後に説明）という独自の世界構造を持っていることにあります。それは現在の日本人にはおそらく最も遠い存在、理解し難いものといえるかもしれません。

さて、以下で道徳について扱うわけですが、本稿ではイスラムの道徳観を理解するために道徳一般論を鳥瞰することとします。そこで、『TBSブリタニカ』所収金子武蔵氏（以下金子と略記）の「道徳」を導きとして、議論を進めたいと思います。さらに加えるに、道徳とオーバーラップする部分が非常に多い「倫理」などにも触れながら、検討しましょう。

（一）道徳の語義

金子は道徳の語義について冒頭で「ある社会で、その成員の社会に対する、あるいは成員相互間の行為を規制する内的、外的規範の総体である。」と述べています。この語義によりますと、道徳の成立には、二つの重要な側面がある、ということが分かります。一つは社会とその構成員との関係という存在です。そしてもう一つはその構成員である人間同士の個々の関係性ということですが、つまり、道徳が成立するためには、

社会（この意味も実は問題ですが、後に検討します）が不可欠である、ということを行っています。金子によれば、道徳は社会という人間の集団、それも決して烏合の衆ではない、一種の秩序を持って構成された集団の存在と深い関係を持っている、ということですが、

さらに言えば、金子の道徳観では道徳とは、社会の構成員を社会の内に取り込む、あるいは閉じ込めておく内面的・外面的行為の規範ということになります。つまり、その社会の成員を社会に結びつけ、その結果個々の構成員が社会の構成員として認められる、そのために不可欠の要素として、道徳は存在するということとです。これは、社会という全体と構成員である個を結びつけるものとして道徳がもつ働きに着目したものです。

ところで、この社会という言葉も、概念もなかなか厄介なものです。というのも、この社会という言葉も、明治のときに作られた翻訳語で、いわば近代語です。

というのも、金子の道徳論では、社会という概念を個人と対置、あるいは両者を一応別の存在として分けて考えるという近代的な概念が前提となっています。しかも、その道徳は宗教と一応区別された独立の存在とするのです。しかし、この近代ヨーロッパ生まれの考え方を共有していないのがイスラム社会である、ということを考えてと、このような認識がそのままどこにでも当てはまるとは必ずしも言えません。少なくとも非ヨーロッパ社会の理解には、これをそのままではめたのでは、現実社会の実態と理論の間にずれが生ずる、ということはおく必要があります。

もっとも、これはイスラムのみならず日本社会でも同じなのですが、日本人は近代化の過程で、この違いに無頓着できましたので、その違いに鈍感になっっているように思われます。ですから、日米摩擦というよう

な話で、「日本異質論」が巻き起こるのです。自分たちはアメリカやヨーロッパの手本を忠実に真似ていると信じているからです。そのときに、木に竹を接いだような近代文明の異様さに思いを馳せない、というのが現代日本文化の特徴です。ですから、他の文化を理解するには、随分と注意が必要ということになります。

ではその違いは何か、と申しますと、それは所謂宗教の扱いです。特に、近代以降のヨーロッパ世界の思想研究では、宗教を正面から論ずることが伝統的に避けられています。というより、ヨーロッパ人は文化の深層において無意識的に前提としているが、それが意識のレベルでは表現されていないが故に、それを学んできた日本人が、勝手に宗教性を排除してきた、という側面もあります。

しかし、社会と宗教の関係を抜きにイスラム世界は語れません。つまり、近代ヨーロッパ世界の価値観のように、宗教と社会を別物として別々に論じることは、イスラムでは出来ない、ということなのです。この点が、一番大きな相違です。これを一般にタウヒードの理論といいます。

何はともあれ、イスラムの検討は、西洋近代文明の一種の文化的な癖といえますか、特殊性、それは限界性といいたいと思いますが、を我々に教えてくれます。そして、同時に、日本文化の特殊性をも合わせ鏡のごとくに教えてくれます。勿論、イスラムの特殊性も同様です。

次に、もう一つの道德の側面として金子が挙げているのが、社会の構成員としての個々の人間同士の関係性という側面です。これは比較的分かりやすいものです。つまり、人間関係を円滑にするための行為に着目した視点です。この視点は、イスラムにおいても他の世界と変わりはありません。例えば、アラビア語やペルシャ語の道德・倫理を表す *Akhlak* (基は、単数形の *Kalad*) は、人格、性格、品行、行状(が良い)と

いう意味も持っています。そのほかに、道德と訳される言葉である *Adab* は、教養(あること)や礼儀正(しいこと)と(ら)いう意味を持ちます。

これらは、人間関係における望ましい行為を表す側面の道德を表しています。しかし、では、どのような行為が「教養ある」「礼儀正しい」等と他者から評価される行為なのでしょう。そこで、行為の規範ということが問題になるわけです。しかも、その規範は、単に行為という表面的なものに止まらず、内面つまり心にまで及ぶというわけです。

このように考えると、道德という言葉の広がり益々複雑になってきますので、次に言葉の歴史について検討しましょう。

(二)「道德」という言葉

日本語、というより漢語の「道德」は、道と徳という漢字の合成語です。周知のように漢字は一つ一つ独立した意味を持っていますから、まず、個々の漢字の意味内容から検討します。金子によれば「道」はある所へ行くための踏み通るべき道であり、これらが転じて、例えば日本では武士道、剣道、茶道といわれるように、定石という意味をもっている、ということになっています。つまり、道とは特定の目標に向かって行くために、辿らなければならないもの、逆に言えばそれを行えば、目的に到達できる方法ということでもあります。一種の規範を意味します。一方徳は、得に通ずるものであって、この道を体得することを意味する、というわけです。

ですから、道德はある目的を成就するための方法とその会得を意味する、ということになるわけです。問

題は、その目的になるわけですが、「道」の語には、白川静博士の「辞統」によれば「種々の儀礼によって啓かれたものが道であり、人の安んじて行くところであるから、人の行為するところを道といい、道徳、道理の意となり、その術を道術・道法といい、存在の根源にあたるこの唯一者を道という。道は古代の除道の儀礼の意より、次代に昇華して、ついに最も深遠な世界をいう語となった。」となります。

この表現からいうと道とは「最も深遠な世界」を表すのはもちろん、「その世界へ人々を導く道理、原理という意味」ということになります。つまり「道」とは、理想の状態、それは「神の世界」、「完成された世界」とそれへ人々を導くことによるようです。

しかし、この漢字の意味では、どうも今ひとつ、現代我々が用いている道徳との意味の関連が不明確なのです。しかしこれを英語（ヨーロッパ言語）の方から見ると、その意味は少し明確になります。

つまり、moral, morality は「その原語はラテン語の mos (pl, mores) は、習慣 habit となり慣習 custom となった行動の仕方、様式であり、特に複数形の場合には慣習を意味する。それゆえ moral はラテン語の consuetudo (習慣、風習、生活法、交際などを意味する。)と同じである。この語は consuesco からきているが、suesco は、慣れることであり、con はあるものと、特にある人とへともにくを意味しており、したがってコンスエトゥードはある集団の慣習である。一般に慣習は道徳にとって重大な意義をもつが、これは慣習が規範理念 (Normative) の意義をもつことよっている。」というのも、「習慣とは数多くの試行の結果、落ち着くところに落ち着いて生じたものである。」となるのです。しかも、この道徳は、混乱などが落ち着いてきた時には、制度 (instituto) と呼ばれるものとなるわけです。つまり、道徳と呼ばれる習慣的な規範をみな受け入れ、共有し、道徳に即した社会が形成されると、道徳は (in-status: 秩序立てること) 制度となる。つまり、道徳は、社会を構成する価値基準となり、社会を組織化する基となる、というわけです。

さらに、金子は、道徳とほぼ同義語の倫理についても、面白い解説を加えています。つまり、「(倫理の) そのへ倫は仲間であり同類であり、畜生に対してへ人倫」と熟語をなすよう人間の仲間である。へ理は条理・筋道であって、道と同じである。(所謂) 五倫五常は父子、君臣、夫婦、長幼、朋友という仲間が成立するための践み行うべき道である。」と説明し、その故に「道徳と倫理は殆ど区別し難い」とするのである。

そしてこの倫理に対応する言葉が、ethics とされます。というのも、この ethics は ethos などから出来た言葉で、ギリシャ語の意味は「住み慣れた場所」、日本語のへ里、へ人里にあたり、「かかる場所もっている慣習を、また慣習によってしつけられた個人の性格を意味し、前述のモレスと同じとなる」のだからです。

このように道徳、倫理、モレス、エトス……などは「いずれも住み慣れた土地に於ける共同の慣習にかかわる。」言葉を基にして作られた言葉であるわけです。ここで注目されるのが、「住み慣れた場所に於ける習慣とは何か」ということです。これに重要なものは「祭礼、祭儀、儀礼、礼学、カルト、ドローメン」なことです。というのも、これらはみな古代社会において「祖先の神や土地の神などの祭り、またはあがめる際の供儀、讃歌、舞踏、などの」行動様式と関係しているのです。

つまり、これらの言葉は、古代社会において聖なる存在、聖なる空間の意味体系、行動様式を表している、というわけです。古代社会においては、聖なるものの共有が、共同体維持に不可欠であり、古代社会

は、これを守ることが最重要事項でした。そして、この共同体維持のために定められた諸規範が、所謂道徳の起源というわけです。

このように、道徳や倫理の基礎は、古代社会の祭祀を中心とする儀礼などを中心として形成されてきたものであり、その中には現代的に言えば「宗教、芸術、政治、法律」などが含まれていたとされます。そして、これらは神話を中心に構成され、伝承されていたのです。これが神話時代の道徳にあたるものです。

(三) 歴史時代の道徳の起源

この神話時代が、所謂「枢軸時代」(ヤスパースが表現した言葉で、紀元前八〇〇年頃から同二〇〇年頃をさす)になると、「神話と結びついたカルトから宗教、芸術、習慣もまた道徳として文化し、内面化、(非神話化)、合理化された。」のです。つまり、この時代は現代社会を根底で基礎づける諸々の価値観、特に精神的な価値観が文化的に形成された時代に当たります。そしてこの時代に、孔子、孟子、ゴータマ・ブツダ、旧約聖書の預言者達、ソクラテス、プラトンなどが出現し、従来の価値観を再構成し、新しい価値体系を提唱しました。それが、現在儒教、仏教、ユダヤ教、ギリシャ思想の創始者達です。彼等は、今尚人類の師と呼ばれる人々です。彼等は、古来以来の習慣を内面化し、我々が「道徳」と呼ぶ行為体系に組みなおした人々です。ですから、彼等の「道徳」的な価値を受け継ぐ我々にとって、これらの人々は、未だに人類の師と呼ばれるのです。

しかし、例えば、同じような倫理規範を創成し、人類に大きな影響を与えたゾロアスター教の創始者ゾロアスター(紀元前八世紀―七世紀頃の人、あるいは前十一世紀とも言われる)やマニ教の開祖マニ(二一六―二七六頃)のようにすでにその価値体系に従うものが無くなったものは、その道徳律は雲散霧消してしまっています。

しかし、ゾロアスター教にしても、マニ教にしても歴史の一時期、人類に大きな影響力を持っていました。例えば、ゾロアスター教の場合は、イスラム教徒によってゾロアスター教を国教とするペルシャ帝国が滅亡(七四二年)させられ、さらにその改宗政策によりペルシャから殆ど消滅してしまつた九世紀までのほぼ一五〇〇年間に亘り、時にはペルシャから中近東全域、さらに時にはエジプトまでを支配する巨大な帝国を支える宗教であり、道徳規範でもありました。またマニ教は、東は中国、西は現在のスペインにまで広がつた世界宗教で、キリスト教の教父アウグスチヌス(三五四―四三〇)も、キリスト教に改宗するまで、マニ教徒であつた、とされる宗教です。これらの宗教の基本は、信徒一人一人の倫理性を重視する宗教でした。彼等は極めて厳しい倫理的な行為を要求され、事実それに従つて居りました。

しかし、その宗教、特に教団はキリスト教やイスラムの台頭によって壊滅し、現在その信徒達は殆ど存在していません。そうしますと、ゾロアスター教やマニ教によって提示された道徳規範は、社会的に継承されず、消滅します。

以上のように、この時代の道徳の特徴は、宗教と密接に結びついているということです。ただし、この時代の宗教は所謂自然宗教あるいは民族宗教と呼ばれるような宗教から生まれた改革宗教、所謂創唱宗教、普遍宗教と呼ばれる宗教をさします。この宗教の特徴は、宗教的な救済を個人の行い、つまり其々の宗教が定めた宗教的な規範、つまり道徳の実行度と結び付けるといふ発想を持ちます。

これが所謂倫理宗教と呼ばれるもので、仏教、キリスト教、イスラム教がこれに当たります。それ以外の

宗教は、基本的に個々人の行為が、個々人の宗教的な救済（理想状態）と直接結びつくものではないので、少なくとも、それが宗教の中心として位置付けられてはいません。

ところが、理論的にはこのようになるのですが、現実には普遍宗教も所謂民族宗教の提示する倫理観を前提として、それに変革を加えたものであるのです。その基本は古代以来の伝統的な倫理観をベースにしています。つまり、民族宗教が支えた社会からそれを基礎として普遍宗教は成立したのですから、如何に地域や民族の壁を打ち破ることを目指した普遍宗教といえどもその民族固有の習慣や民族宗教の倫理観などから、自由であることは不可能でした。

その意味では、普遍宗教を生み出した民族的な倫理が、民族的な限定を取り去ったというより、それを取り去ったつもりで世界に普及したのが、普遍宗教であり、その宗教を支える倫理観である、ということが言えます。宗教倫理に於ける普遍倫理とは、このような構造である、ということが言えます。そして、その典型が、仏教と後に検討するイスラムの倫理です。

(四) 人倫の理法としての倫理

上述のように普遍宗教との関連で倫理が説かれると、如何に普遍宗教といえどもその宗教を信仰するものと、そうでないものとの間で倫理観の相違が生ずることとなります。つまり、特定の宗教と結びついた倫理観では、人類に共通の倫理観が見出せないことになる。勿論、普遍宗教は、全ての人間を対象としているという前提ではありますが、しかし、倫理という具体的な行為、つまり生活面における実践を伴うものではない、理念的な普遍性だけではカバーしきれない側面を持つこともまた事実です。そしてこの不整合に対して、所

謂宗教と倫理・道德の関係を再吟味し、結果として宗教の束縛から独立した普遍道德を構築しようとしたのが、ヨーロッパ近代の思考です。

この点を金子は「枢軸時代」に道德が祭儀に核心をもつ習慣の内面化として生じたのは、それが宗教、芸術、法律、技術などから分化したことを意味しているが、その分化（ただし連係をたつことではない）の面があきらかではないのである。したがって改めて道德の本質が反省されるべきであるが、その際宗教からの分化は考察の焦点が人間にかかわるべきことを命じている。」としています。

いずれにしても、道德が宗教から半ば独立して、つまり神や絶対的存在の支配から人間自らの存在を中心とした道德観の形成が、ここに始まったわけですから、それがキリスト教文化を基とする近代ヨーロッパという社会から生まれた、という点に十分注意が必要です。

というのも、このような人間中心の道德観・倫理観は、いわばヨーロッパ近代において、展開された熾烈な宗教戦争、つまりカトリックとプロテスタント両派の惨憺たる宗教紛争の結果として生まれてきた面が強いからです。この点に関しての、詳しい解説については、今回省略しますが、それは所謂啓蒙主義や人文主義といった近代ヨーロッパの基本思想で、なおかつ日本人も近代以降それに追随してきた文化、というより文明であったのです。

実は、イスラムの道德を理解するということは、この近代ヨーロッパにおいて生み出された新思考への反省、あるいはその相対化という面が強いために、一層違和感をもつこととなるのです。というのもイスラムでは、このような知的伝統はもちあわせていないからです。

いずれにしてもイスラムの道德観を理解するためには、私達日本人の倫理観・道德観の構造をある程度知

つておかなければならないので、さらに、近代ヨーロッパの道徳思想の展開を検討しましょう。以上のように、ヨーロッパではカトリックとプロテスタントというキリスト教徒同士の熾烈な戦い、それはどちらの信仰そしてその実践である生活が、神の正義を實踐しているか、つまり正しい道徳に則っているかという正当性をかけた闘争であったのですが、その結果練り広げられた悲惨な殺戮への深い反省から生まれた、云わば宗教教義を棚上げした苦肉の策の論理、それが近代の文明であり、それを生みだした近代思想だったのです。

つまり、近代以降のヨーロッパではカトリック・プロテスタント両陣営を纏めるのに、キリスト教教理を基とする道徳論は展開できなくなり、他に両者を結びつける原理、しかも両者の宗教的な立場に抵触しない視点を探さねばならなかったのです。

その結果生み出されたのが、人倫の理法(道徳法則)という考えだ、ということです。

勿論、この人倫の理法の考え方は、神の存在を否定したものではありませんが、従来の道徳観のように、その起源を神や宗教伝統に直接求めることが出来ないために、人間の存在そのものに、中心点がおかれませんでした。

そこで問題となったのが、道徳における社会性と個人性の関係(自他の関係性)を如何に意味づけるか、理解するかという問題です。この問題は、神の存在を媒介すればそれほど深刻な対立には発展しません(後にイスラムのウンマと個人の問題で論じます)。ところが、いわば道徳観の拠り所としての神を棚上げせざるを得なかった近代ヨーロッパ人は、その代わり、人権や国家という概念を創出し、自由や平等という理念を中心に道徳観をすることとなったようである。それは人間中心の思想であり、人間本位の思想、もつとい

えば人間が神の代理となることをも結果として意味しました。

(五) 人間中心の道徳の諸相

道徳が個人的であるか、社会的であるかという問いに対して金子は「道徳の法則は、法律のごとく外から課せられるものではなく、みずから課し、みずから律するものである。したがって自律の自由なくして道徳はないが、自由はただ内省によってのみしられるものであって、……(中略)。道徳は個人内面の事柄である。」としています。

つまり、近代的な道徳においては、古来の道徳の根元としての神の存在が、否定、少なくとも前提から外されたので、その代り、個人というものが想定され、この個人の自律が不可欠となりました。そのために道徳とは「自律の法則」である、という位置付けが出来るとの考えが生まれました。この考えを体系化したのが有名な哲学者のエマニエル・カント(一七二四―一八〇四)です。カントは「意志がその格率を通じておのれ自身を普遍立法的とみなしうるように行為せよ」と教えたそうです。この点のみを問題とすれば、全ての人が個々人の道徳律を自ら定めて実行できる、ということになります。そうしますと、生来においてエゴ的な人間は互いに身勝手に振る舞い、社会が成立しなくなる危険性があります。そこで、次に、人間はポリス的存在である、というアリストテレスの言葉の通り、社会的人間の存在が問題となります。

そこで、次にカントは道徳の重要要素としての自他の法則について「汝およびおのの他人の人格における人間性を常に同時に目的として扱い、決して手段としてのみ扱わぬように行為せよ」と教えるわけです。これについて金子は「すべての行為は自他関係において成立するものであって、自己のみの行為はなく、必

ずや他の協力にまたなくてはならない。」として、道徳の相互性について「他者にむかつて要求するのと相応したことが自己にむかつてもなされなければならない。この意味においては、自他の法則は相互承認（ヘーゲル『人倫の体系』）の法則とも呼ぶことができる。」としています。

ただし、金子も言っているように、この思想の背景には「すべての人格は一つの世界ともいふべきものであって、そのうちに起こることはしよせん当の人格の意志することに限られている。」という近代ヨーロッパ思想に特有といえると思われるが、極めて強い個人主義的思想があるのです。いわば近代ヨーロッパの道徳論の基礎は、絶対の神に代わって、絶対の自己が基本となっている、ということにあるのではないのでしょうか？

勿論、このような個人主義では社会は存在できませんから、次のような限定が加わります。つまり「自己立法によるすべての格率は、自然の国としての一つの可能性的な目的の国に調和すべきである」とカントも釘をさしています。これを金子は「人倫の理法（道徳）は自律の法則―自他の法則―共同体の法則においておのれを頭わにするものであり、言い換えると、道徳の本質はこれら三つの法則をもつて諸側面とする」と結論しています。

では、この三つの中でどれが一番大切なのでしょう？ 勿論、どれも大切なのですが、近代道徳思想の基礎を築いたといっても過言ではないカントはやはり、「人倫の理法もいわゆる道徳法則として捕らえて時には、たとえ自他の法則があるといっても、その基本には自律の法則がすわっている。したがって道徳はしよせん個人内面の問題」と捉えているようです。しかし、人間は社会的にしかいけられないので、「道徳はあくまでも個人的であると同時に社会的である。そこで社会的なほうをしゅとして、人倫の理法を展開する

べきこととなるが、そこに普個の相即による人倫の体系（ヘーゲル）が成立する」と金子は言っています。

（六）宗教（絶対基軸）無き道徳の限界性

ヘーゲルは、この点を解消すべく「絶対人倫」という概念を持ち出さざるを得なかったのでしょう。つまり実体人倫―相対人倫―絶対人倫という弁証法です。そして、ヘーゲルは絶対人倫（道徳）実践の場として国家を考えました。

神なき思想の行き着くところが国家という擬似的な神であったということは、日本の近代社会にも共通するものです。特に、日本では明治の廃仏毀釈以来、近代的な神道（所謂国家神道）が、国民の精神原理となりました。ところが、この神道は、典型的な民族宗教で、日本という国家や日本人（民族）を超える思想が希薄ですから、大陸や南方などで強制的に信奉させた一時期を除き、日本人の信仰領域を超えることはありませんでした。もともとだからこそ、国家が神格化されたのであり、またそうしやすかったのです。

余談ですが、現代の日本人の多くには、国家を超える原理が意識されることは無いようです。しかも、現代人には、この国家さえ希薄となってしまっています。日本の道徳の荒廃の一因はこのようなところにも見出せると思います。

いずれにしても如何にヘーゲルがその神聖性を強調しても、個人やそれが形成する社会（例えば、会社など）、さらにはその際最大単位としての国家を、道徳の基準、あるいは最終目的対象としても、これらが、神や仏教で言う法のような超越的な存在の代わりとなることは出来ません。なぜなら、これらは所詮、現実社会における相対的な価値対象だからです。したがって、それを基準あるいは最終目的とする諸規範は、相

対化された道德規範の一部としての道德(小道德とこれを呼ぶこともできるでしょう)とならざるを得ないのです。しかも、この小道德は、所謂法規範のように罰則という強制力を持たない故に、個々人の良心という曖昧なものに帰着せざるを得ません。

近代西洋文明における道德観は、このように道德の基礎を人間に引き下ろしたために、政治や経済的な打算と同レベルの問題となつてしまった感があります。

そのために結果として、功利主義的な、多数派即善という世俗主義の限界が見え隠れします。それは神など人間を超えた点に存在根拠をもたない、つまり絶対軸をもたないが故に相対的となり、結果として多数派を善とするという志向に結果的に行き着くわけです。

そこで、再び価値の問題が出されてきます。現代の黄金率などの思想は、この方向です。しかし、相対化によつて形成されている世俗社会において、絶対的基準はありえないので、結果として「最大多数の最大幸福」すなわち「多数決」的な原理が結果として道德基準にも当てはめられるわけです。しかも、その時強調されるのが人間の理性というものです。これは合理性とか、科学という名称と置き換えても良いでしょう。

特に、近代から現在を貫通する理性崇拜は、人間が神に代わつてこの世界(地球)を支配、あるいは管理する権限(steward ship)を神から与えられている、と考へ近代思想から生まれているのです。これが謙虚に発現している間はいいいのですが、暴走してしまうと人間に都合の良いことが、即ち合理的、科学的と位置付けられることになります。

つまり、どんなに人間が理性、つまり神の代理者としての資質を強調しても、所詮人間には限界がある、という謙虚な思想を失う可能性が、西洋近代の理性信仰にはあり、それを基礎としている近代的な西洋道德にはあるのではないのでしょうか？

勿論、西洋には依然としてキリスト教の道德が陰に陽に生きています。ただ、その存在は以前ほどの人間の意識を拘束する力が薄らいではいるようです。

以上、金子武蔵氏の所論に沿つて道德の概要を、主にヨーロッパの道德思想の発展を中心に考察してきました。その理由は、この思想のはがれの上に我々近代日本人も乗っているからであり、またこの流れを我々が道德の流れそのものとして無批判に受け入れているということを認識していただくための考察でした。

というのも、我々が当たり前として依拠している道德観が、実は決して普遍的なもの、唯一のものではない、ということの自覚がないと、これから展開するイスラムの道德体系は、日本人にとっては理解しがたいものであり、またイスラムへの偏見や誤解を生じかねないからです。

その意味でイスラム道德の理解は、ヨーロッパ近代思想、さらにはそれに盲従してきた日本近代の特異性を我々に知らせてくれる試薬となるのではないのでしょうか。(以下次号)